



LA NOUVELLE

N°26

PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 藤倉洋一 (1970/昭45)
2021.4.1 発行

問われるフランスデモクラシー …「脱悪魔化」する極右勢力…

渡邊啓貴 (1978/昭53)

＜ル・ペン人気の復活か＞

世論調査では、2021年1月の時点でマリーヌ・ル・ペン党首(「国民連合RN」、2018年6月旧「国民戦線FN」から改称)の大統領選挙決選投票での支持率はマクロン大統領支持率に肉薄する。前回2017年大統領選挙の決選投票では34%の支持率で大敗北、苦杯をなめたル・ペンだったが、その後3年半が経ち、前回選挙直後のダメージから回復しつつある。他方、就任以来の人気の降下に歯止めがかからないまま、コロナ禍で低迷にあえぐマクロン大統領は支持率を後退させている。

国民戦線(FN)は2018年3月の段階では大統領選挙の痛手から回復しておらず、『ル・モンド』紙の調査では、「ル・ペンの立候補を支持する人」は28%にしか過ぎなかった。大多数の人々は「FNはデモクラシーにとって危険」という判断をしていた。

ところが2019年11月ごろになると、マクロンとル・ペンとの決選投票を想定した調査では、ル・ペン支持者が45%にまで達し、2020年3月には、56%の人々が「ル・ペンはいつか大統領になる可能性がある」と答えるようになった。そして2021年1月の調査では、ル・ペンは2022年大統領選挙第一回投票ではマクロンを抜いて第1位26-27%、決選投票でも48%の支持率を得て、マクロンと並ぶという予想が出たのである(Le Parisien紙1月29日web版)。FNは2014年欧州議会選挙で単独で国内最大支持率の第一党にはなったが、連立政党がなく、これまでも決選投票では過半数を取ることはできなかった。この状態は初めて大統領決選投票に父ジャン＝マリー＝ル・ペンが残った2002年以来変わらない。それが今では単独で過半数に迫るまで支持率を伸ばしているのである。

＜社会不安の増幅＞

その理由は何か。

その最大の理由は「(社会)不安(insécurité)」だ。そしてそれを克服できないマクロン大統領の「エリート政権」に対する批判の増大だ。

フランス政治の特徴の一つである「異議申し立て」(反政府抗議のための直接行動)は、マクロン政権に対する反政府抗議行動を活性化させている。年金改革に反対する公務員・国鉄労組の長期スト、Dガソリン税引き上げに抗議した「黄色ベスト運動」、難民・移民/新型コロナウイルス感染対策への不満。社会不安の中での官憲暴力の顕在化も国民の政権に対する不信感を募らせている。街頭行動のたびに出てきて暴力騒ぎを起こす「ブラック・ブロック」という暴力集団はつとに有名だが、これに



対して警察・治安当局の対応も日増しにエスカレートしている。昨年11月パリ共和国広場でテントを設営し、キャンプの準備を始めた450人ほどの難民に襲い掛かるようにして、強制退去させようとした治安部隊の暴行の映像は国民の反発を買った。同月、黒人の音楽プロデューサーに対する警察官のリンチ事件も国民の反感と不安を増幅させた。そうした中で警察官の武装強化・催涙弾の保有、イベント会場などへの介入も認める治安強化目的の「包括的治安法」が成立したのである。

＜極右ポピュリズムの論理＞

1972年に設立したFNはもともとカトリック的秩序観に支えられたナショナリズムと反ユダヤ主義/反共産主義を標榜する極右小勢力の寄せ集め政党だった。それが1984年欧州議会選挙で一躍11%を獲得、その後安定的な10%勢力となり、1995年大統領選挙では15%、そして2002年と2017年には決選投票にまで残るようになった。

党勢躍進の要因は70年代末ごろから移民・外国人排斥の主張を失業問題と結びつけることに成功したからである。「フランスとフランス人、最優先」というスローガンは結党以来のものだが、失業は移民の進出によってフランス人の職が奪われた結果だという論法、つまり移民排斥は雇用問題にすり替えられた。偏狭なナショナリズムの論法は「富裕なエリート」に対抗して、自分たちこそ社会を支える一般庶民、すなわち「真のフランス人」という発想に発展していった。こうして労働者階級にまで支持層を広げたのである。その後党勢が伸び悩む中で党路線の「穏健化」をめぐる党内角逐を経て、2011年創立者ジャン＝マリー＝ル・ペンの三女マリーヌ・ル・ペンに代替わりするが、2007年大統領選挙後から、路線は排外主義を後退させ、社会保障重視へとさらに転換、党勢拡大は一層加速化した。ル・ペンの表現で言えばFNの「脱悪魔化」だ。

＜民主的ガバナンスの逆説＞

筆者は1980年代以来大統領選挙を含む主だった選挙をすべて現地で視察している。かつて戦闘服を着た支持者に囲まれて排外主義を怒号していた父ル・ペン率いるFNの集会の疑似的危機感と緊張はもはやない。マリーヌは男女カップルの支持者に囲まれた穏やかな雰囲気の中で、ほかの政党と同じように共和主義を説き、男女平等とフランス革命の理念を説く。そうして男尊女卑の前近代的な生活信条をいまだに大切にしているのはイスラム教ではないか、と笑顔で巧みに語る。

フランスの民主的ガバナンスが問われている。社会不安が広がる中で、デモクラシーの仮面をかぶった極右ポピュリズムが悪魔の微笑みを浮かべ、言辞を弄して国民に擦り寄っている。しかし彼らが選挙という民主的プロセスを戦い抜いた後に待っているのは、あるべき大革命の延長にある共和国ではない。フランス社会の病理は深い。

(帝京大学法学部教授、東京外国語大学名誉教授)

コロナ禍で終えたベルギー留学

言語文化学部フランス語専攻4年 岡 莉穂

第2セメスターが始まって数週間経った昨年の2月末、イタリアで新型コロナウイルスの感染が拡大し始めていたが、ベルギーではさほど感染は見られず、私はどこか他人事のように思っていた。現地でも知り合った日本人の友人の中には、中国人と間違われて路上で「コロナ!」と叫ばれた人もいて、アジア人に対する風当たりが強くなってきたのを感じた。3月に入ってから大学の授業が徐々にオンラインになり、とうとう3月半ばにはすべての授業をオンラインで実施する旨が発表された。3人のシェアメイトのうち2人は帰国することを決め、もう1人はイタリア出身のため、帰りたくても飛行機が飛んでいないと嘆いていた。帰りたくない一心だった私だが、シェアメイト2人がベルギーを離れた日、外大の留学生課から帰国要請のメールを受信した。要約すると、「世界の感染状況に鑑みて、本来は認められない危険度レベル2の国でも滞在を認めるが、JASSO奨学金はレベル2になった時点で止まる」という内容だった。外大から一緒にリエージュ大学に留学していた友人と、奨学金が止まったら生活できないよね、と泣く泣く2人で帰国することに決めた。

帰国を決めてすぐ、日本への飛行機を予約することにした。直行便のチケットは高かったため、入国拒否をしていないトランジットの国を調べながら、なんとかドバイ乗り換えの便を予約した。

フライト当日、ブリュッセルにある空港まで無事に行けるのかさえ不安だったため、出発時刻よりもかなり早く家を出た。電車は問題なく運行して無事に着いたため、空港で長い待ち時間があつた。店はすべて閉まっていて、人の姿もまばら。あれほど活気のない空港を見たのは初めてだった。日本へのフライトが減少していることを受け、他の日本人を待たためにドバイからのフライトは6時間も遅延した。羽田に着いたのは深夜2時過ぎで、飛行機を降りてからPCR検査もなく、今後の滞在場所やそこに行くまでの交通手段などを聞かれた。14日間公共交通機関を使ってはいけないこと、自宅などで外出をせずに生活することなどが説明された。私は東京の家を引き払って留学に出ていたため、仙台の実家に帰るべく両親に車で迎えに来てもらった。

帰国者がいるということで、家族全員が自宅でのテレワークを余儀なくされ、2週間ずっと家に閉じ込められた息苦しい生活だった。その後、オンラインでも留学先の授業を引き続き受講すればJASSOの奨学金を受給できるということで、実家で留学を継続することにした。6月末に最後のテストを終え、リエージュへの派遣留学は仙台の自宅で幕を閉じることとなった。想定外の最後を迎えた留学にやるせなさがあったが、また何らかの形でベルギーに滞在できる日を待ち望んでいる。(2月15日記)



日本で、フランス語を生きる

水林 章 (1976/昭51)

わたしは2011年からフランス語で著作を発表するようになった。フランスでは日本人のフランス語表現作家ということになっている。

きっかけは、わたしが翻訳した『学校の悲しみ』(みすず書房、2009)の著者ダニエル・ペナックを介して彼の無二の親友で高名な精神分析家のJ.B.ポンタリスの面識を得たことである。2008年9月8日のことであった。

J.B.ポンタリスを交えてのペナック宅での夕食は実に楽しい時間だった。はじめての出会いだというのに、どうしてこれほど気さくな、儀礼とは裏腹な内容豊かな言葉が交わされるのだろうか、いつもの疑問が心の中で立ち上がり、それが学生時代からずっと勉強してきた「啓蒙の世紀」を本質的に特徴づけているサロン文化における「会話術」の伝統へと繋がってゆく、そういう言葉の内的反芻をその時も経験することになった。

J.B.ポンタリスは『学校の悲しみ』の翻訳者に好奇心を刺激されたようだった。遠い日本でどのようにしてフランス語に出会ったのか、なぜ18世紀なのか、その中でもなぜとりわけルソーなのか、どうして外国人「なまり」がないのか等々、実に多くの質問を繰り返してきた。わたしはそのすべてに律儀に答えた。楽しい「食事と会話」(この二つは「哲学者にとって独りで食事をするのは健康によくない」というカントの言葉が暗示するように、切り離せない)が終わり、そろそろ帰宅というときになって、J.B.ポンタリスは「今日の君の話は優に一冊の本に値する」と、わたしに言った。

翌日、わたしはダニエルの車に乗せられて、J.B.ポンタリスの待つ出版社ガリマールに赴いた。J.B.ポンタリスはガリ

マールの有力なエディターでもあり、「L'un et l'autre」という叢書のディレクターである。ジーバー(J.B.ポンタリスは親しい友人からは単にJ.B.と呼ばれており、いつしかわたしも彼をそのように呼ぶようになった)のオフィスに入ると、その叢書に「自分とフランス語」をテーマに一冊本を書いてみないかという誘いがわたしを待っていたのである。

これがフランス語で本を書く発端となった。できあがった本Une langue venue d'ailleurs — 「遠方から来た言語」とでも訳せようか—は2011年の1月に刊行され、アカデミー・フランセーズから賞を受けるなど、望外の好評を得た。新聞・ラジオ等のインタビューに応じるために、春休みを利用してパリに向かったのだが、実は飛行機に搭乗したのが3月11日で、大震災の惨状をシャルル・ド・ゴール空港で知ることになった。フランス語での著作活動は『遠方から来た言語』一冊で終わっても不思議ではなかったのであるが、実はその後も続いて今では6冊が刊行され、現在7冊目を執筆中である。なぜフランス語で書くのか。この問いに答えるには優に一冊を要するが、ひとことで言えば日本語によって支えられ、媒介される社会関係・社会構築とは別の道を模索し、実感するためと言っておこう。なぜそのような実験を試みる気になったのかといえば、そこには3月11日以降に露呈した日本の政治と社会のあり方に対する強い憤りと深い絶望がある。その憤りと絶望は安倍・菅政権の自民党政治で文字通り極点に達した。

多くの知性が指摘しているように、この国は依然として近代「市民」社会の実質を備えていない。なぜこれほどまでに無様なのかということ、死ぬ前に日本語で一書にまとめたかと思っ



第25回仏友会総会のお知らせ

昨年4月に開催予定の掲題は、新型コロナウイルスの感染拡大で11月に延期し、更にコロナ感染状況の改善がみられないことから、この4月25日に再延期することを余儀なくされておりました。しかしながら、この2月皆さまにアンケートを実施、感染状況の指標がステージ2以下になることを期待しつつ、総会開催を模索して参りましたが、現在下記の通り開催する方向で検討中です。最終決定につきましては、コロナ感染の今後の状況を踏まえ、4月初めに行い、改めてメール等で皆さまにご連絡を差し上げますので、よろしくご了承のほどお願い申し上げます。

日時: 2021年4月25日(日) 14:00~16:00
14:00~ 総会、14:40~ 講演
(食事・懇親会はなし)
会場: 大手町サンケイプラザ301/2号室(対面)及び
会員各自宅(ZOOMによるオンライン)
講師: Monsieur Jérôme LE BOIS 本学准教授
演題: 「日仏文化の差異を考える」(ご講演は日本語)
定員: 来場(対面): 15名(参加費@2千円)
オンライン視聴(ZOOM): 65名(無料)
申し込み方法: 改めてご連絡します。また、ZOOM未経験の会員(アンケート回答者)には、ガイドランスを実施する予定です。

*** **
【会報誌LA NOUVELLEのバックナンバー】
川口裕司教授のホームページでご覧いただけます。下記URLからアクセスしてください。No.25には今回講師のお写真と演題説明なども掲載しております。
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/index.php?id=166>

《パリ便り》

コロナ禍における助け合い

パルシオ徳光直子 (2008/ 平 20)

新型コロナウイルスの感染がフランスで拡大してから、ほぼ1年が経ちました。1回目のロックダウン、2回目のロックダウン、さらに18時以降の外出禁止令と、終わりの見えない闘いに心も身体も疲れた人々の声があちらこちらから聞こえます。現在、ワクチンの接種が全国で徐々に進められているものの、感染者数はまだ多く、先の見えない状況は当分続きそうです。

今週末(2月下旬)は春の陽気に恵まれ、気持ちが和らぐひとときとなりました。パリの人々にとって大切な社交の場であったレストランやカフェなどは閉まっていますが、公園はジョギングをする人や散歩をする人でにぎわい、芝生の上でピクニックをする人の姿もありました。気持ちが緩みすぎているのではないかと不安になる側面も確かにありますが、公園や森はほっと一息つくことのできる、心のよりどころとなっています。

私は今、パリ13区にあるフランス国立東洋言語文化大学(Inalco)日本学部の准教授として働いております。外大を卒業後、フランス社会科学高等研究院(EHESS)で博士号(社会学)を取得し、パリ大学(旧パリ・デイドロ大学)にて講師として経験



「望郷」

北 昌宏 (1976/ 昭 51)

昨年7月より外語会理事会に新任理事として参加させていただいております。この度藤倉会長からお声掛けいただき、仏友会にも入会しました。今後ともよろしく願いいたします。

さて、簡単に自己紹介します。私は、1972年4月に兵庫県から上京し赤羽で下宿生活を始めたのですが、同じ下宿の先輩から空手部に強引に勧誘され入部しました。学生時代は、当時西ヶ原にあった校舎の喫茶室で、午前中は将棋、午後は週5日、空手の稽古に励むというおおよそ勉学とは縁のない怠惰な生活を送っていました。人生は皮肉なもので、卒業後は、入社した会社での業務の関係で、アフリカの仏語圏で仏語を使用する機会を与えられました。その時に再び勉強し直したことが幸いし、かろうじて仏語科卒業と名乗ることが出来、現在も仏語とは離れずに済む生活を送っています。

最初に新入社員のまま赴任したアルジェリア (1976 ~ 79)

「国境なき子どもたち」(KnK) が私にくれたもの

寺田朗子 (1975/ 昭 50)

あの子に会いたい…この子はどうしてる?… 思う気持はあってもこのコロナ禍にカンボジアにもフィリピンにも行かない。KnKの子どもたちはみな、どうしているのだろう。とても気になっている。

「国境なき子どもたち」は日本で生まれた組織で、辛く厳しい環境の中にいる少年少女が、学ぶことを通して自分で一歩でも前に進み、自立に向かうことをサポートしている。

初めてフィリピンに行ったのは2000年で、刑務所、鑑別所、スラムなどを訪問。かなりの辛い経験だった。その後も墓地や路上、パヤタスというゴミ山の区域で生活する子どもたちと会い続けている。墓地で知り合いなつてきた当時8歳のA君はダンスが上手。でも勉強はあまり好きではなかった。



昔日の青春 佛友會々報

80年のタイムカプセルを開ける 21

坂井英俊 (1965/ 昭 40)

渡邊伸一郎氏の寄稿、昭和8年6月刊から抜粋してみよう。<満州・ロシア・ポーランド・ドイツと長い間汽車に乗って、それからベルギーを越え、フランスへ入る、夜明けにパリの北停車場へ着く、朝の陽がモン・マルトルの丘高く聳える白い聖心寺を桃色に染めてあるのが、車の窓から見え始める、いよいよパリだ。パリへ着いても、別に見知らぬ、言さへぐ外つ国へ来たやうな気はしない。多年夢にまで見てあるところだもの、真っ先に本場で役立てたフランセは、税関を切り抜ける談判だ、フランスのお役人もフランス語を話す外国人には頗る寛大であった。日本で考へておたのと行ってみたので違ふのはまず言葉である。学校で習ったフランス語と巴里で民衆の話すのを聞くのと、かなりの相違があるのには驚いた。

学校で習ふフランセは文語である。すなわち他所行き言葉でもいふべきであらうか。リシュリュウ以来磨きのかかった立派な言葉である。餘り立派すぎて融通がきかず、窮屈千万な言葉である。教養ある人ならこのフランセを使ってくれるから実によくわかる。議会の弁舌もフランセであるから相当に解る。ところで、今一つの口語だが、これはなかなかわからない。一般のフランス人がくつろいで使ふ、つまり平常着のフランス語

を積んだ後、現在のポストに採用していただきました。日本研究や日本語教育のエキスパートである同僚と、日本の社会・文化に並々ならぬ関心を持つ学生のおかげで、刺激的な毎日を送っております。分からないことは分からないと言い、自分の考えを堂々と述べる学生との対話から学ぶものは多く、授業は私にとっても大変興味深い発見の場でもあります。

イナルコも他大学と同様、新型コロナウイルスの影響で、特に学生は大変な苦勞を強いられている状況です。大学からはインターネット環境や必需品に関する支援、パリ市からは食事や住居支援等はあるものの、自分の勉強部屋のない学生や家族の面倒を見なければならぬ学生、アルバイトを失った学生もあり、学生間の格差問題が可視化されました。多くの学生はこの状況を他人事とせず、友人同士で分からないことを教えあったり、場を盛り上げるのに長けた学生が大学の教室を借り、孤立状態にある学生と話をする場を作ったりするなど、学生同士だからこそできる多種多様な試みが行われているのが見受けられます。日本学部では昨年9月、フランス語専攻の日本人学生とイナルコの学生の間でオンライン日仏交流会を実施しました。交流会の最中、学生は「やだ、先生入ってこないで」と言わんばかりに、必死に自分の言葉で伝えようとしていたのを覚えています。日仏交流会の開催に協力してくださった川口裕司先生、外大の学生に声をかけてくださったTUFS日仏交流会の南雲さん、この場を借りてお礼を申し上げます。

大学のみならず、フランス社会全体においても多くの社会問題が浮き彫りになりました。例えば、これまで「治安の悪い地

では、アラビア語交じりの仏語に大変驚かされました。当時は、首都アルジェの空港でさえ、便名の表示も搭乗案内もアラビア語で行われており、アラビア語の数字だけは飛行機の利用のため必死で覚えました。アルジェというと、授業で、講師の方がジャン・ギャバン主演の映画「望郷」(原題:Pépé le Moko)を話題にされたことがありました。その映画の印象が強烈だったことから、休日に真っ先にカスバとホテル・アレッチェに向かいました。ところが実際には、映画で見た光景とはかなり趣が違って愕然としたことを覚えています。まさしく望郷の念が募りました。広大なサハラ砂漠を仲間と縦断した旅も忘れられません。

次に駐在したチュニジア(1979~83)での最大の思い出としては、苦勞の未完成したプラントの竣工式に列席いただいた故ブルギバ大統領に祝賀記念の兜を差し上げたところ、兜は武士の魂だと大いに喜ばれたことを昨日の出来事のように鮮明に

けれど、実に時間をかけ、21歳で小学校卒業資格を取った。彼の卒業式には約束どおりお母さんとして出席した。私にできる精一杯の愛情表現だったから。

KnKはカンボジアにもフィリピンにも「若者の家」という少年少女が滞在できる施設を持っている。カンボジアの家で15歳頃に会ったB君が言ったこと、「ここに来た人はみな『また来る』と言うけれど、そのあとはなかった。あなたは3回目。私たちを思ってくれていると信じられる」という言葉は心に響いた。見守り続けることの大切さを知った。B君はよく勉強をし、今は30歳を超えたが、家族を持ち、国の公的資格のガイドとしてアンコールワットでしっかりと働いている。ただ、今は観光客はなく大変と聞いて心配している。

同じ家に設立時から暮らしたC君は両親を地雷で亡くした。初めて私に小さな声で「ママ」と言ってきた少年。行くといつも会いに来てくれる。ある時彼が「頼みがある。もうすぐ生まれる娘に名前を付けて」と言う。花のように優しく美しくという思いを込め、「ハナ」と名付けた。数年前訪ねた時、会いに来

である。いきなり平常着を出されるといささか面食らふ。日本にあっては、フランス通と自他共に許しておたのが、悲観せざるを得ない。パリに居る日本人の画家などはバーやカフェで、女の子を捉えへて自由?に喋ってゐる。ところで全部とは言へないが、少なからざる部分の画家先生が一度、紳士仲間の宴会へ出ると、さっぱり駄目である。先生たちは口語だけは耳で聞いて達者であるが、文語の方はできないのである。実際下宿の一部屋へこもって文法の初歩からやれるものではない。片言でも日常の用は欠かないから、それで押し通すのである。また「下層階級」の人間は、この口語しか知らない。

しかし、この口語とて近頃は馬鹿にならない。語学者と言はれるには、これも一通り知っている必要はある。殊に大戦後の傾向として、口語の文語への侵入が著しい。いくらアカデミの連中が顔をアカデミにして怒っても言葉はもとより生きものであるから、世と共に押し移るのは当たり前である。いまのフランセ即ち文語とて二三百年前には、ただの口語であったから、口語は将来文語と代はるところのものである。口語といっても、文語を語学校で習った位の者には、早い人で二三月、遅い人でも一年もパリに居ればペラペラになれるから、大したことはない。フランスへ行きさえすれば、必要に応じて直ちにうまくなれる。日本に居て古典的なものを読むのにはそんなものは知らなくても少しも差し支えないのであるが、活きた現代のアラ・パージュなフランス語を学ぶ語学校の生徒としては、文語

域」という点で語られることの多かった地区に関しては、そこに住むエッセンシャルワーカーの存在に焦点が当てられ、コロナに感染するリスクは決して平等ではないことが強調されました。また、INSEE(フランス国立統計経済研究所)の調査(4月21日発表)では、シングルペアレントや田舎の一人暮らしの高齢者が特に困難な状況にいることや、社会的な孤立が特に生活困窮層とハンディキャップを抱えた人々(高齢者を含む)に偏っていることも報告されました。他にも失業や家庭内暴力や子供の虐待、テレワークによる家事・育児負担の問題などの顕在化など、枚挙にいとまがありません。しかしこれをきっかけに、以前から存在していた社会問題に多くの人が関心を向け始めたことも事実です。今、フランス国内では、学生に無料で食事や自習スペースを提供するレストランや、女性を対象にしたSNSの助け合いグループの結成、地元のカフェやレストランへの寄付活動や、失業した人々に散髪を無料で提供する美容院など、様々な助け合いの動きが見られます。昨年ロックダウンが始まった際は20時に医療従事者への拍手を送っていましたが、事態が長引くにつれて「自分にできることをしよう」と行動に移す人々が増えているようです。本当に頭が下がります。

新型コロナウイルスの感染拡大で浮き彫りになった問題は、コロナが収束と同時に解決されるものではなく、社会の仕組みに関する抜本的な議論が求められていると思います。私も一教員、一研究者として、自分にできることを実践していきたいと思っております。そしてなにより一刻も早く新型コロナウイルスが収束し、苦しむ人が一人でも減ることを願うばかりです。

思い出します。

短期出張先で思い出すのは、ニジュールの首都ニアメで、新酒の解禁日の朝、空輸されたボジョレ・ヌヴォを夜の祝宴で楽しんだことです。余談ですが、ニジュールへの入国ビザを取得する際に、絶滅したはずの黄熱病をはじめ、コレラなどの予防接種を品川の検疫所で受けたときは、伝染病というものがまだアフリカでは残っていることを知り、非常に驚きました。

近況ですが、仏語は、テレビで講座を時々視聴する程度の勉強しかしていませんが、機会があればいつか仏語圏を旅したいと考えています。趣味の将棋は、今でも活動を続けており、毎年夏には、グランゼコル(学生20名程度を本郷で受け入れ、日本文化の一環として将棋を教える講座を受け持っています。毎年、将棋の普及も兼ねて海外旅行をしていたのですが、昨年は渡航ができず残念でした。

最後に、会員の皆様のご健康とコロナが一日も早く終息することを祈っております。

たC君の後ろからいきなり小さな少女が「おばあちゃん」と飛びついてきた。なんとハナちゃん!いつも携帯で顔を教えていたという。おばあちゃん冥利に尽きる瞬間だった。彼は今厳しいながら、バイクタクシーの運転手をしているという。会いに行きたい。どうしているのだろう。

当時の子どもたちも一人前になり、かつては「Mammy テラダ」だった私の呼び名は、今は「グランマ」と変わった。私に飛びついてくるかわいい子どもたちをずっと見守り続けたい。そしてそれぞれがこの先、小さくてもいいから夢の花を咲かせ、心の温まる幸せを見つけてほしい。KnKは小さなNPOだから大きなことはできない。でも、小さいからこそ心を繋げる細やかな仕事ができると思う。

KnKでもらった数多くの出逢いは私の宝物。私には抱きしめながら「遠くからでもいつも見ているからね」と伝えることしかできないかもしれないけど…あの子たちの笑顔は何物にも代えがたいと思う。かわいい子どもたちと会える日が早く来るように心から願っている。

だけでは物足りない、多少は口語に関する知識も養ふべきだ。現に最近盛んに、フランスもののトーキーが日本へ来るが、口語を知らない興味は三分の一は、殺されるだらう。ただし、なにも生嚼りの口語を使へというのではない。ただ知っておく程度に止むべきである。

フランセ即ち文語は楷書、全て楷書が元である。パリに居る日本人の画家などが使ふフランス語は、手真似より少しはましであるというフランス語はそのめっちゃくちゃな草書である。諸君らはひたすら楷書を習ふ時代である。ただ楷書だけが字であると思ふのはいけないと・僕が言ふのである。>

ここで増田俊雄氏からも引用してみよう。<徒らに自負心が強く外国語や宣伝が極めて下手なのが日本人である。国内一時の誤報は自然に新聞が訂正してくれることもあるが、外国との関係での沈黙や袖手傍観は永遠に何物をももたらさずに終わる。海外へ遊ぶ同胞は「おし」の旅をして永遠に何物をももたらさずに終わる。「おし」の旅をして倉皇と帰国するのが多く、在外中日本のことをいろいろたずねられたりして祖国を説く好機にめぐまれたりしても物言ふすべさへ知らないから、終に相手の微苦笑を買ふにとどまる臍甲斐なさである。欧米人の大多数は未だに、日本にはパンがあるか、電灯や水道の設備があるか式の奇問を日本人に浴びせる事実が証明する通り、日本をよく知らない。>

<次回へつづく>